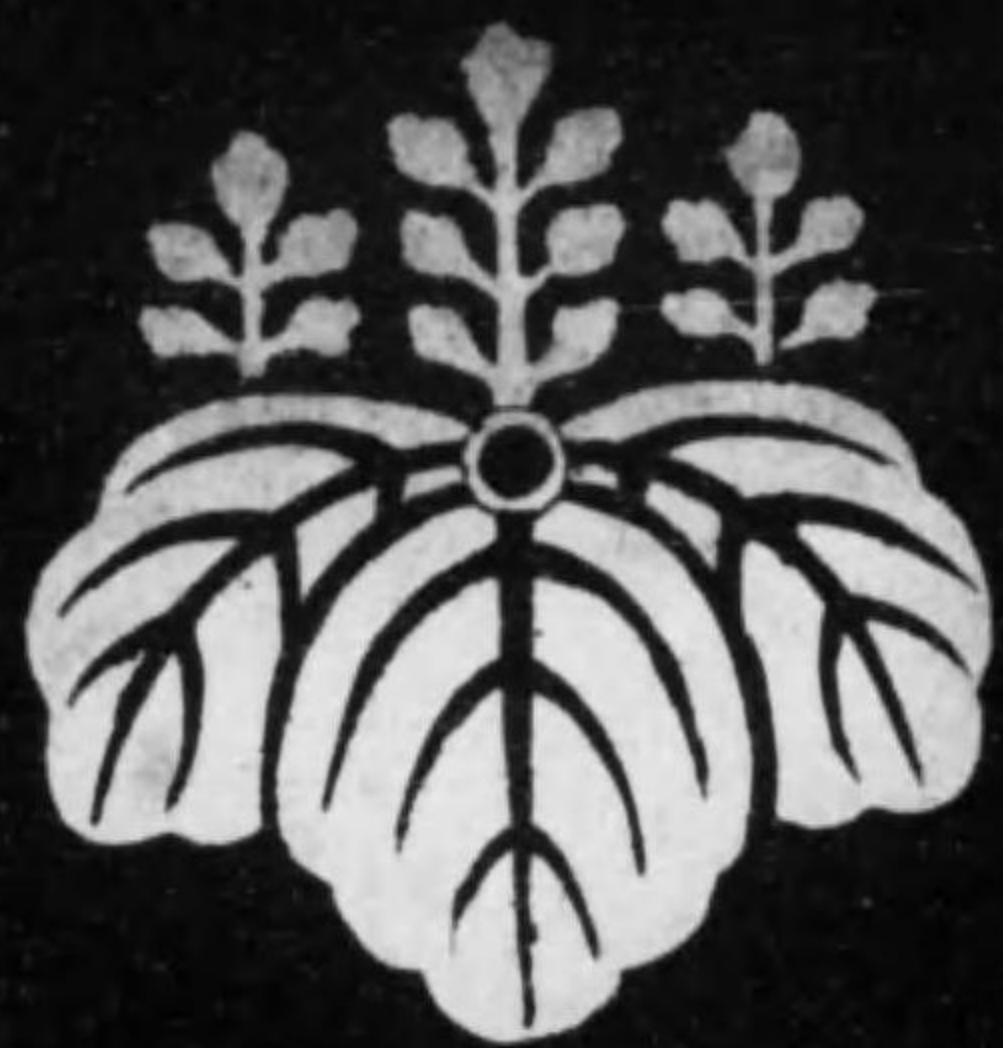


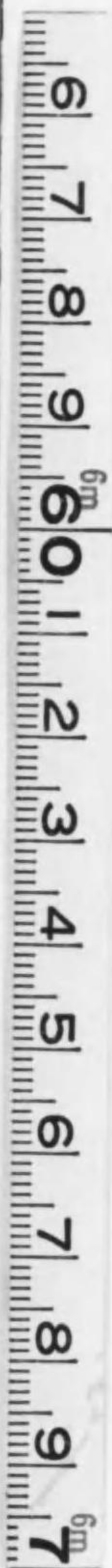
特261

681



未生御流  
景花入花  
千種之錦  
(共二卷中)

上



始





盛花 千種花錦序

挿花は藝術の華なり文化の華である其の清英な姿態乃至複郁たる薫化は激  
然と争闘と混濁に疲れた現代の社会を淨化訓導して民衆に慰安と上へ是と温平た  
る淨き樂園に導いて行挿花の社会民衆に及ぶ感化は自然的に微妙に時に宗教的教  
育優上國風教の規範を醸成する所挿花の力も亦偉大と謂はぬはならぬ

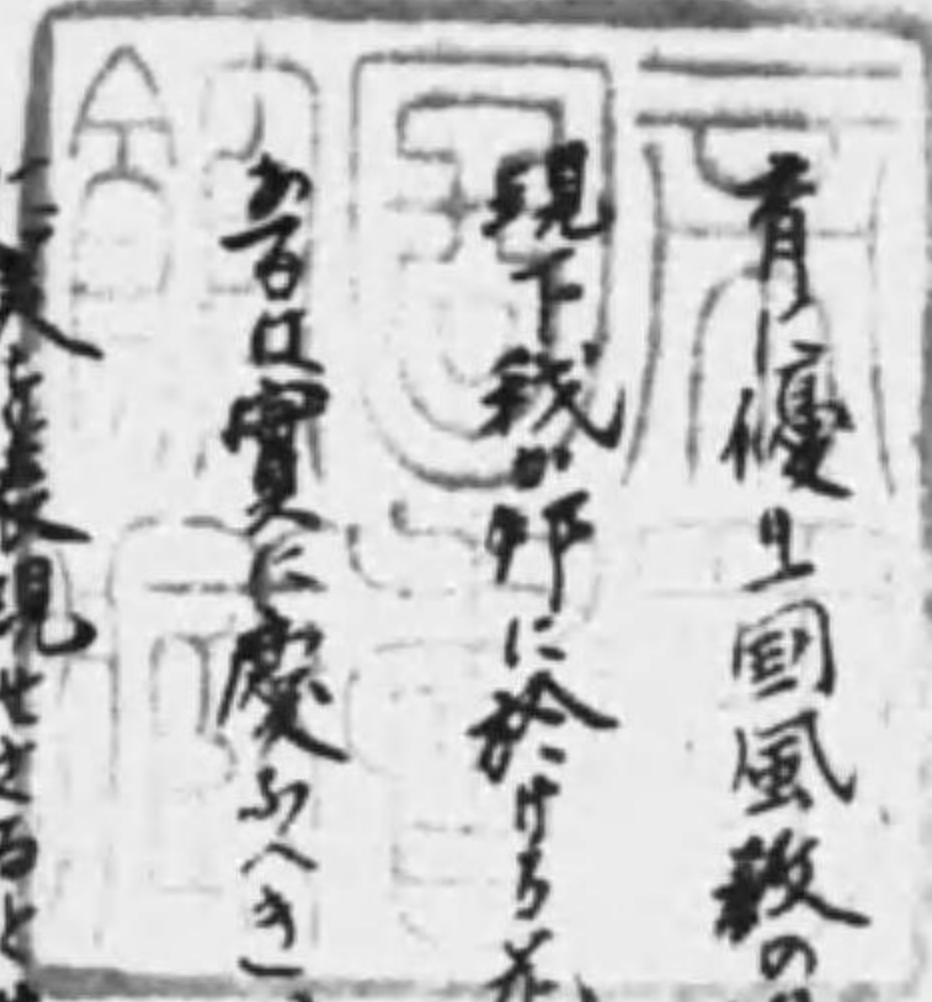
現下我が邦に於ける花道の發達は著しき勢力を示し絶えず藝術の殿堂に向て向上し

あるは實に慶ぶべき現象であるが然し如何なる藝術も個性を無視し人工を改めれば真個  
は美を表現せざると共に親み得る藝術美の本領域に進むるもそれはよい殊に盛花を投入する

景花等に至りては夫々の風格基調ゆり枝葉の布置排列の塩梅等特に細心の注意を

拂はさるは全く無意味な挿花に止り決して價値ある藝術美に接觸し或は感得する事

は出来ぬは謂ふ道もよいと亦は是は現下興隆せる斯界の爲に統一ある規矩・下に所





道に志あるものをして燦然たる藝術の殿堂に向はしむべく茲に本書を著し其の張る所嚮  
奇き道の規範を示した次第である

生存競争の激成する今日風月を伴とし挿花の別天地に慰安を標求するも亦人生の風  
流ある挿花床にあり清風自ら空を運る定は是れ人生の至樂にして社会風教の  
たにも亦風雅襟懐の爲にも最も緊要な事と斯こそ人生は至幸にして藝術の花  
と咲き匂ひ其所に豁然として其の存在を深く且つ大に意義ありしむるも有りて  
ある

昭和三年九月仲秋

未生御流

風雅社主

未生軒 北村樂南

誌

はるかた

藝術の高調たる今日では生花の外に盛花や投入乃至景花をとりあつて個々の風格は夫々藝  
術上の美を表現し亦上卓景等と風流その専ら賓客饗應應や儀礼に用ひられ猶且  
獨樂風流に遊ひ自然と人格と高潔をならぬ社会風教の上にも良効果とあて居るの  
は實に喜しい事であります素より盛花や投入乃至景花杯も昔は生花と共に向し挿花  
と呼び習はれ居たのてすか文化の向上とれた現時では夫々風格を規め狭義とては別個挿花  
に由り部門に別れたのも特世然とむる所々喜しい現象と謂はねばなりませぬ近頃自然主義  
を高くする一派は立生は素より盛花にも投入も自然其儘を挿入るゝのを本領の様には宜  
傳へ居るのには余諷諷と人も學問してこそ人道を年々尊敬も様々草花も無用の枝葉  
を除き大々の風格に基き挿入るゝその品位ある盛花や高尚な投入乃至景花と成るも有り  
あることは何人も其論の無い所でありませぬ



本書は上二巻に分れ上巻は盛花と下巻は分散式盛花の應用とそとて投入及び景花に  
 付き夫々理論と挿法の規矩を示し挿法に示しおれば當御流の風格に憧憬する人  
 達は宜しく熟覽會得し習熟作意する時は容易に其の堂奥に入り藝術の妙諦  
 に觸れ人と花と自格通徹し始めて藝術美を體現するに至るのてあります尺寸の瓶  
 も亦花の天地にて清風自ら整に充ち無心の草花有心の風情誰か又是と愛せざる  
 者か何りませぬか

昭和二十七年秋半は

空涼腕に沁むる

未生師流

猪師範

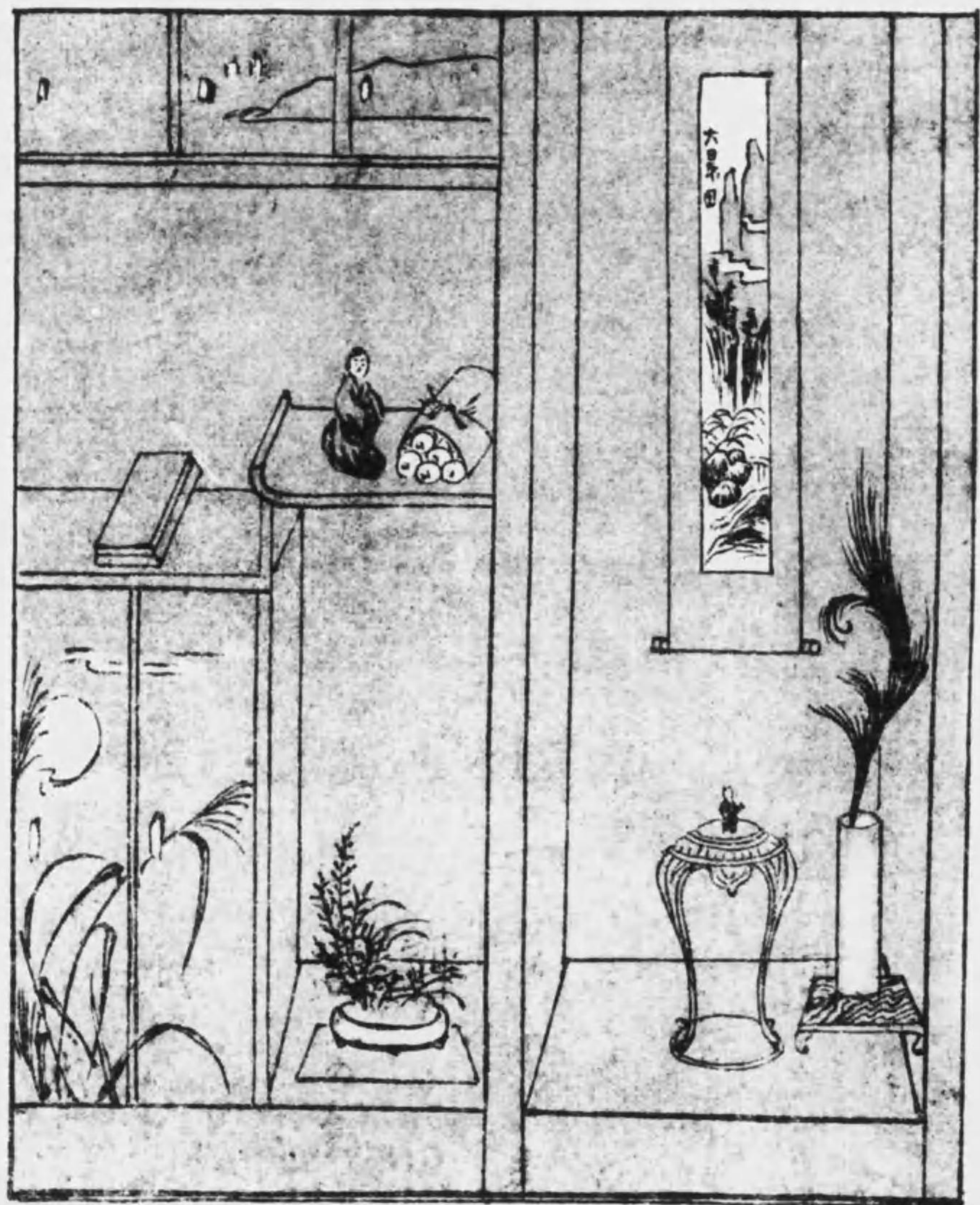
總取締

未生園

北村半有女

と心あす

本勝半床の図





花臺の図



盛花 千種花錦 上

盛花は昔より生花と同様に一体に挿花と桶へ挿し  
 入して居ました。其の当時は花も極く軽く入し、清  
 酒を桶方に、現今の挿方とは大分と變つて居る。そ  
 れが日露戦後後花道が体た動喫すると共に盛花  
 も段々に丸さ小ましく洗練され、茲に一つの形式を具た  
 ものと成りて全く藝術化され、生花の飾りたる盛花に  
 用ひらるる様になつたのは、新道の発達と向上の爲に盛  
 は一以事である。

当御流の盛花花型は宇宙代状態を大観し、吾人と  
 最も交渉の深い山里水、自然の境地に立脚し、出来上つ



たものであるから他の流派の花魁とは趣を異にし、崇巖雄渾  
 にして自然餘情ある趣を表す事が出来るので作者の個性  
 を入小藝術美を露するたは最も適当な挿入である  
 ります素より盛花は日本並敷あり洋室ありの一つの装  
 飾であり賓客郷食意や儀礼を必要とする事は申す迄  
 も有りませぬ唯た自然主義にかぶる其の後の枝葉を  
 挿入するは全の素人挿入何等の美的価値あり及つて其  
 の人の人格を卑下する譯であるから枝葉の採擇草花の  
 取捨は必ずしき事して有ります当御流の盛花は山里水の花  
 魁を基調として季節々々の草木花卉と出来るた美的價  
 値を増大する椒塩梅に常に調和を計るのか根本の要諦で

はるゝ常にも練りて體驗を得る事が重要でありませぬ

古御流盛花の唱へ方は山里水と基礎としてあるから主体とは  
 高き山岩体と近き山と稱ふもとをかかすか林鹿丘とよま西段遠山谷川里藪  
 島海等の名稱が有りませぬか、文人体に適ふ挿入方としての唱  
 へ方は三才挿天地人三光挿日月星山里水の入り方とか  
 真行草とか嶺岳尾どかツラに別れて居ますか要は基  
 礎と成るべきもの程好く調和してアシラヒを付け恰好よく挿入  
 して觀者として如何にも美しいと云ふ感念を喚起すること  
 眼目として居ます斯くてこそ其所に自然美を挿入小を流云  
 新上の美を發揮するつて有りませぬ如何せば恰好よく調  
 和取少く美しく挿入する事が出来るかと謂ふた是には花魁

花魁の権

二



の法別ある人は是に倣ひて生練の功を積む時は主と違ひて個性を  
抹り入れざる事か出来ずすつて實に早く上達するものてありし其の  
花施の法別は大別して左の七種に別れて居るものて有ります

(一)一元式 自然界に於ける山里水の境域に立脚して挿し  
入るゝ草木花卉の出生を正しく不可侵の法別に基き勉  
めて自然を彰すと共に本支節と坐席の場合により能く本  
末の目的に適合する様格好よく調和すべく挿入るゝと本  
義とすは本式の巧拙は生練の功に存するは謂ふ迄も  
あし

(二)文人式 清洒と閑相に雅致ある様に挿入るゝのであるから  
材料の採擇取捨には注意して常に調和を破らぬ様に心

掛か肝要でありますか星の坐は月の坐と別れすゝ其の下に  
附加して居ても長文へよいためてあります

(三)崇巖式 真の挿方て如何にも神々しく尊い感のある  
全体が嚴とて動かし難い形ありて凡て森巖法式とて真  
の坐席には最も相應しい挿法て有ります

(四)集散式 卓上盛花とも唱へ四方面の挿法に於て何處から  
見るも能く調和の挿法にありませうまに應座室  
洋室等に装はるゝものてあります

(五)投入式 一般に扱ひて居る投入とは全く別異のものて山里  
水自然界の煩雜な景色を避けず清洒に於て全体清々しく  
閑雅に挿入るゝのと本義とて居りますものて一元式崇巖式

挿入るゝ

六



と共に間々床に飾らるるものにあつて又茶席にも据へらるるのは此の式でありますか床に飾る時は中央を避けて主体の入れ方によりて左右何れかの側に置くのであります

(六) 聯立式 此の式は主体あり客体あり副体ありの執りか分立ち々而も全体とせば又つて調和が能く執りて居る押法にて是には相應の添物例へは石、砂、蛇籠、蟹、あり

(七) 分散式 山里木、を個々に分散して挿し入るる法式にて個性を充分に發揮するたは此の式が主に應用されるので花器も成るへくは大形のものか調和されるのでありまうと應用の變化も此の式が一番多くいふの曲物も容易く出来又詩

歌俳句をの歌旨と面白く採り入るる事か出来るので有ります  
功を經ると仲々面白いか挿し鑑賞さるるのて有ります

花枝の選擇、盛花の材料は不快の悪臭あるもの有毒のもの一見嫌味あるもの外は凡て用ざるも成るへく風韻雅致に富みたるを選ひ用ると得策とす人家近のものは枝葉の色澤免もす水は山野自生に比し見分りあるは山野に自生の草木花卉の自ら勢あるものを用ふるを宜とす昔は早咲又は残花は珍花として賞用せし事ありしも近來園藝の發達に伴いて温室仕立のもの沢山出る故に昔程賞用せざるも場合により時として珍しく興趣あるものあり然し余り季節を遠くものは他のものとの季節の調和を破り自然を傷むに由り使用せざるを宜とす

花器の選擇、盛花には然して高き花器や銅製砂鉢等には挿し入れ難



此自然と花器草木と置場所とか互に調和せぬ故である夫て銅器陶磁器にて是形  
角形に拍子に丈感エサシクきものが用いらるゝと帝として大体一定されて居るか底の深  
浅や色相などは人々の好に由るので籠類でも牛附きと否とと問はず丈感エサシク  
か愛用されて居るか要するに花器の大小色澤形状等は勿論草木とよ  
く調和するのが重要からるゝは謂ふ迄も余り事してゐるの文字や模様よ  
と有るものは時によつて良し事あるり大方は本節や草木に抵觸し調和  
を破る事少くは心して使用するべきである

盛花の置き場所と花器の据方、盛花は通例坐式客間等一つの装  
飾として飾るのであるが其の用ふる場所により挿方も自然異ちがふ事があるの  
は注意すべき事である

真の坐敷、(例)床に詩書山水人物等の正ま掛軸置物には香爐臺  
卓等凡て作意の正きものを選び装飾し自然と坐式を嚴正な風格を備ふる坐式  
には銅器陶磁器の形状の正き花器を用ひて花枝にても多く木物を正しく  
挿入し臺も相應品位あるものを用ふ

行の坐敷、(例)床に花鳥山水人物等の掛軸置物等の装飾が凡て真  
と草との間に位する風格ある坐式の花器は陶磁器又は籠類の比較的に正  
きものにふしやが類な木物が草物を選び挿入し相應の花臺用ふ

草の坐敷、(例)床に草書の詩書俳画が淡墨淡彩の山水花鳥等省  
筆の掛軸に床飾りも相應し凡の装飾が淡雅にして清洒な坐式の花器は籠  
類にて陶磁器なれば形の清洒ふるを撰み花は草物か繊弱な灌木類にて閑  
静な趣を寫すよ

真行草と謂ふも皆相對に調和を採る事か肝要な例は真は紋陣に仙臺平



の袴、行は紹仙にせる袴草は木綿に木綿袴の意と思は大差をかるべし此  
は洋室の客間にても是と同様の覺悟肝要なり日本式にても盛花は主として  
床脇に飾るを本体とす是れ立坐や投入花に比ぶると總体<sup>たが</sup>文短と感き扱  
に床の軸物や飾物と調和を欠くがうてある場合により本床に装りし差支  
へふき事もあり花畚の据方は三足に限り正面の真中に見ゆる様にするか法  
則であつて多くは高臺に置く事はふいそ平臺か地板を敷くのか法則て床脇の  
戸棚の上ふとに飾る時は臺を用いずても宜し是れ恰好と調和の採れぬ時か有る  
からて有る龍類は通例花臺に上せぬも場合に由り薄板に飾る事もあり然し  
て一式と同じ形式の盛花は三個以上装る事は避るをよとす

盛花の風格、自然の<sup>ま</sup>花弁草木を其終生折りし挿入るは誰ても實に容  
易な事と仰りますか人は美を愛好する念が旺てあるから段々鑑賞眼とそ

して趣味が高まると共に自然其終にては單に極々の素人挿に止り少くも藝術  
美を感せぬ様になるのは下度生れあからの裸体に衣服化粧又學問として  
礼儀と智識を啓発すると同様でありますさ小は挿入る草木花卉は自然  
の終にては兎角乱雑なるものおは少くとも悪と思ふ処は切り去りて雅致あ  
る様に在す事は第一の要諦であります

季節の盛花、春は草木の萌へ出で、花咲き揃ふ頃にて春風暖を送り  
人の心も自と閑雅なる折おは成るべく美しく花物賑々敷く人の目も文<sup>あや</sup>に暖む  
心肝要なるや籠物も此頃草物に相應しきものである

夏は暑氣酷く人の心も何となくあせり勝にていり、する時候おは盛花真  
心しく成るべく閑靜に挿入る、材料も牛薄に水の面を多く見せる様に全体涼  
気なる様に挿す事肝要なり殊に水草は尊はるべく投入式盛花杯の菓子



節物とては上乗なるもの

秋は虫の音も哀に木の葉の散るにも心置れ何となく物淋しき時候なりは自然人の心も滅入り勝り成るべくはらわが華なる材料を採りて麗しき草花丁シラヒ見る人目も心も自つと伸々する様調和の心肝要たる一籠物は此季節にて終るべし冬は雪さへ打ち交りて寒ともわり方目蕭條たる季節なりは春待つ人思も自然と定りて静寂は其心持にて閑静に雅趣ある挿方こそ喜ばしけし祝儀の盛花、祝儀の風習とて祝儀は数多く一日は茲に述へ尽し難し其中主要なるものは

正月、見世材料と賑中へ挿入れ四海同一家内と書き祝ふ心持ありし松竹、梅、水仙、葉牡丹、聖割草、福壽草、日陰蔓、などあり三月、桃の節句とて雛壇に女児を祝ふ折なりは桃に金盃花、柳を

其花季節向目出度竹花ありらひてし

五月、菖蒲の節句とて男児を祝ふ時なりは真菖蒲に小菊、花菖蒲ふと目出度物取合せ賑中へ挿入るべし

七月、七夕祭りありはかや茅、女郎花、桔梗等程よく取合せ閑雅に挿入るべし九月、重陽の節句なりは菊花の大小好の色取合せ恰好よく挿入れ延齡を祝ふ心持にて賑中へ挿入るべし

婚禮、松と菊とし所梅と次とす慶度品々取合せ最も汎守に友白髪迄壽き祝ふ心にて賑中へ挿入るべし松竹梅待難き時は其の季節向目出度品々撰めて挿祝ふべし

移徒、轉宅新築おと先々を祝ひ納むる心なりは季節向目出度品々を挿入れ尤も水面と多く見せ成るべく水草なりは上乗なるもの



追善 初年忌の折束は故人を傷むはて嬾々も草々未だ優き花物少  
しありらひ心して閑雅に挿入ル三回忌より以上は草花も多入ルも全体賑たしか  
らばして故人を偲ひ慕ふの意あるべし

总体祝儀には時と場所を考慮して賑はしく挿入ル哀傷には勉めて幽雅に挿入る、  
事宜しく其人と場所に由りて非禮に成らざる核心掛肝要なり凡て盛花は材  
料の取捨撰擇は勿論多も常に色の配合に注意專一てあります

盛花の挿口 花器は円体階円体等ありあるも要するに円体の中に挿口  
とて方形を取り各式盛花を挿入るのて有ります是には一方面(前面のみか)  
二方面(前面と其後方の左右)三方面(二方面に後ノ側の一方向)四方面(三方面  
に其の一方を連若し)等の挿口が有りますが一元式、集散式、聯立式、崇巖式等  
は各式に通用する、挿口方もも一式投入式、分散式、亦時に由り應用さ

るのてゆりますか四方面は主に應接室洋式客室に敷り卓上會席の盛花とい  
ふ四方何の方面でも眺めらる挿法にて實に賑はしく派手な挿法とも又閑相な挿法  
とも成り又是を四方挿とも稱へるのて有ります

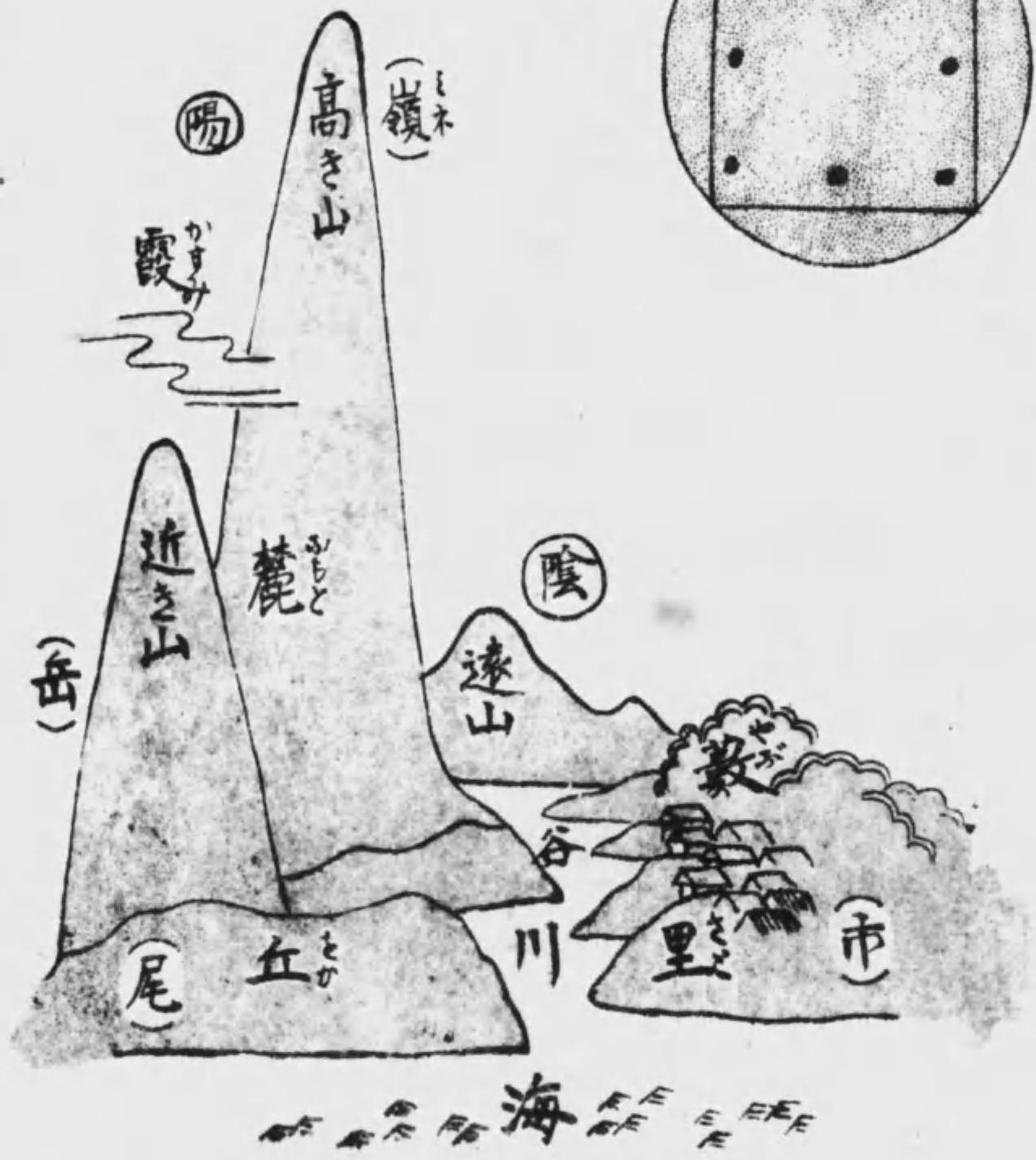
盛花の高さは(高さ)花器の直寸一丈半以内を通例の法とり是より高さを高  
き盛方低きとば低き盛方と稱へます乾も眞行草三体の挿方ありて眞は  
立つか如く直く行は行か如く巾を持ち草は走るか如く横に巾を採りますか時  
に由り物により直立体、斜体、横体、垂体等變化は自由なれは種々工風が肝  
要なるべし

盛花の据所は陽の坐には本勝手陰の坐には逆勝手に掲ぶるのを法則とす四  
方面にては其勝手の処には目立つ花物を挿し分けるべし各方面も是に準へます  
か方面二方面盛花は床脇又違棚に掲ぶるを法とてあります然し卓上花は

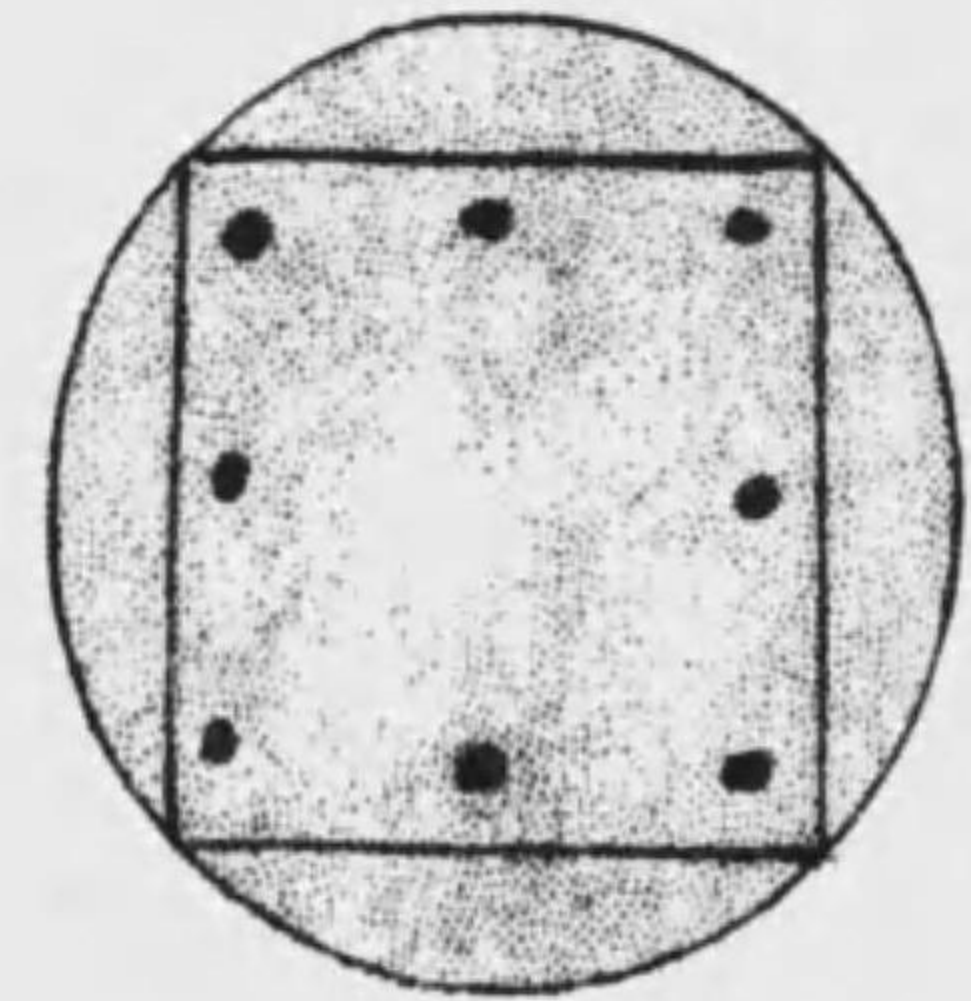




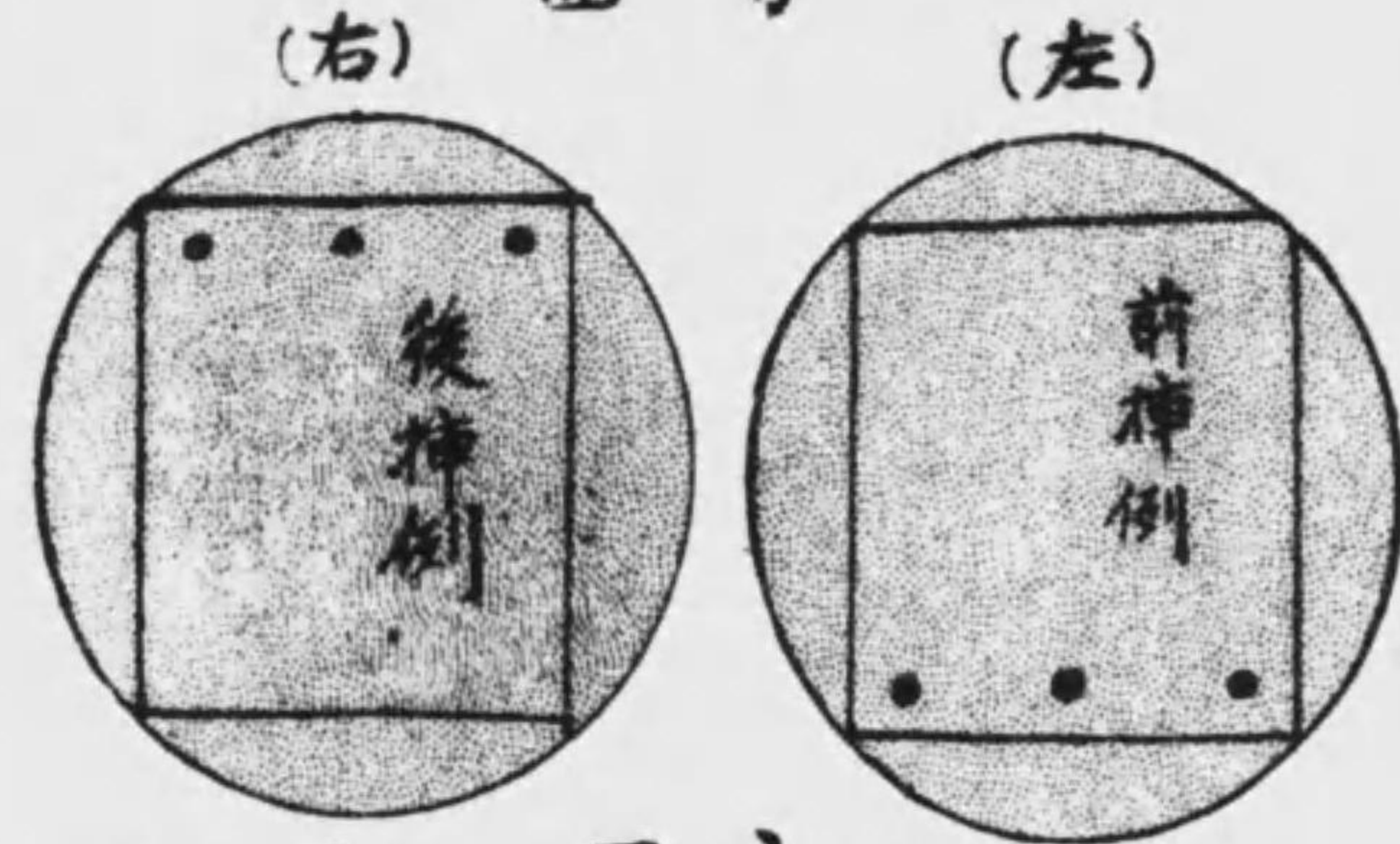




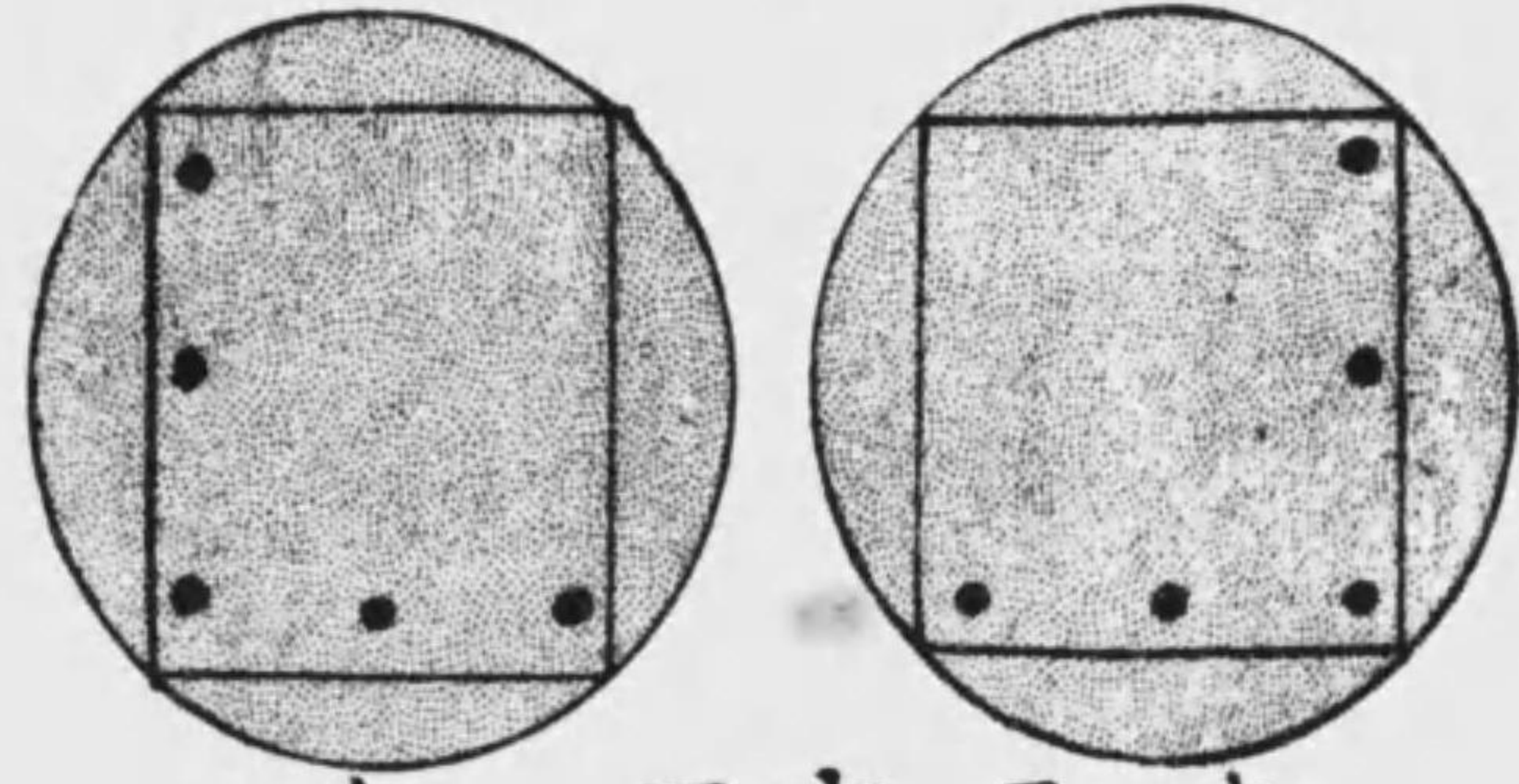
面方四



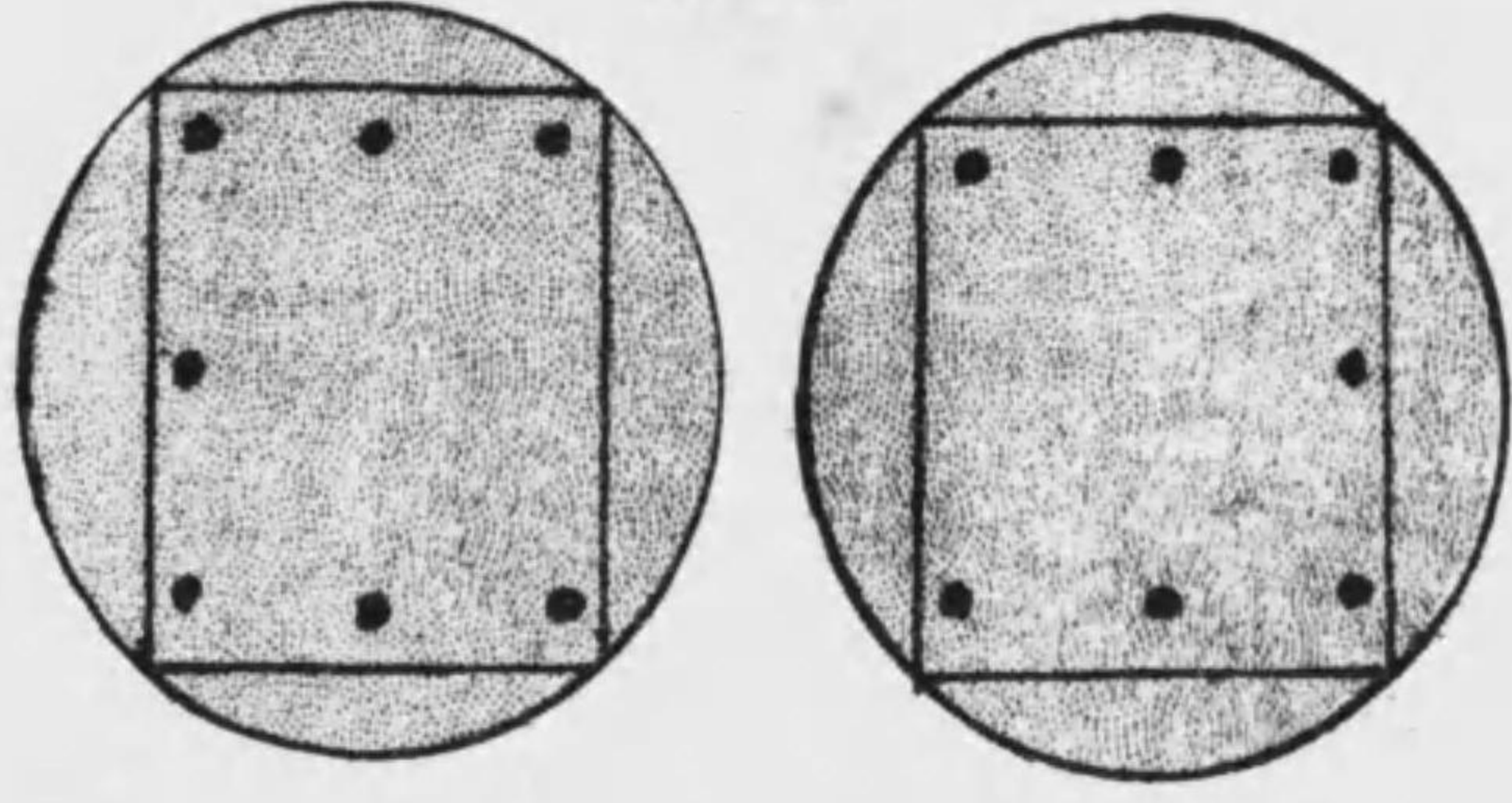
面方一



(右) 面方二 (左)



(右) 面方三 (左)

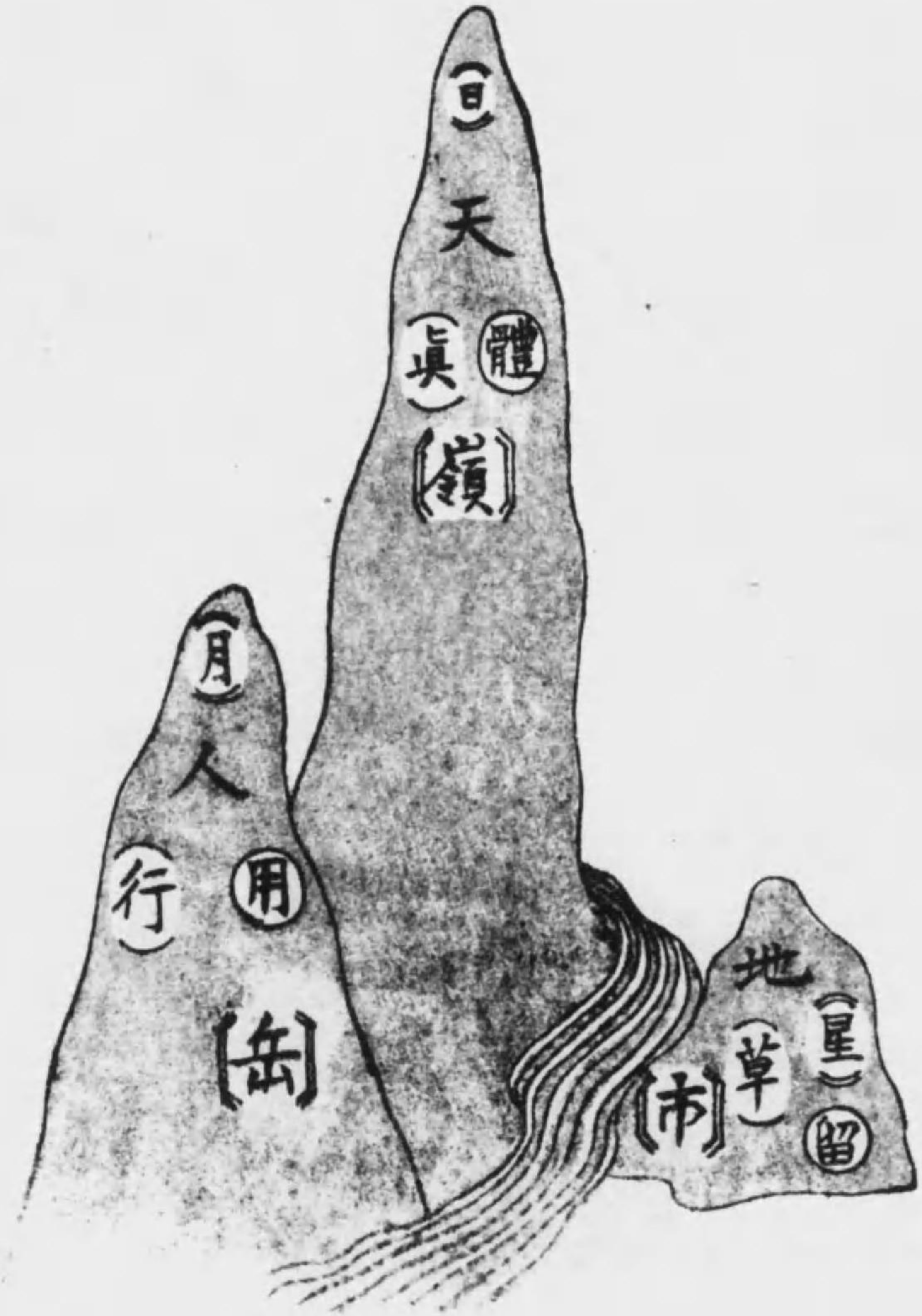


其の時と場所の如何に由り何処に据へても宜いもの有りませす變化に最も富む分數式也  
 投入景花もとは理論と共に詳く下巻に記す(水揚法)并記す  
 盛花の掬口 左図に由り会得すや





(一元式)





(一元式)

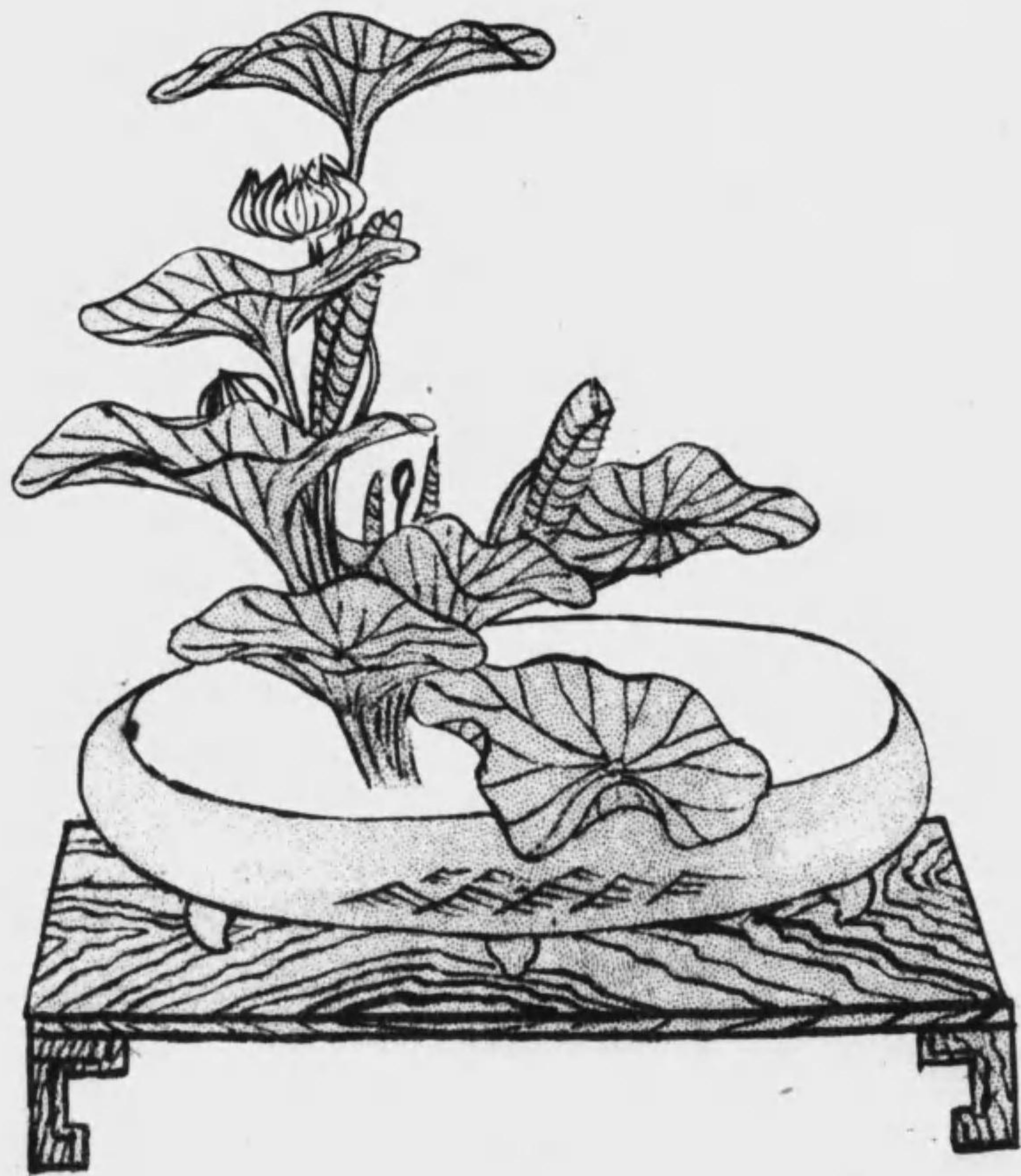


(一元式)

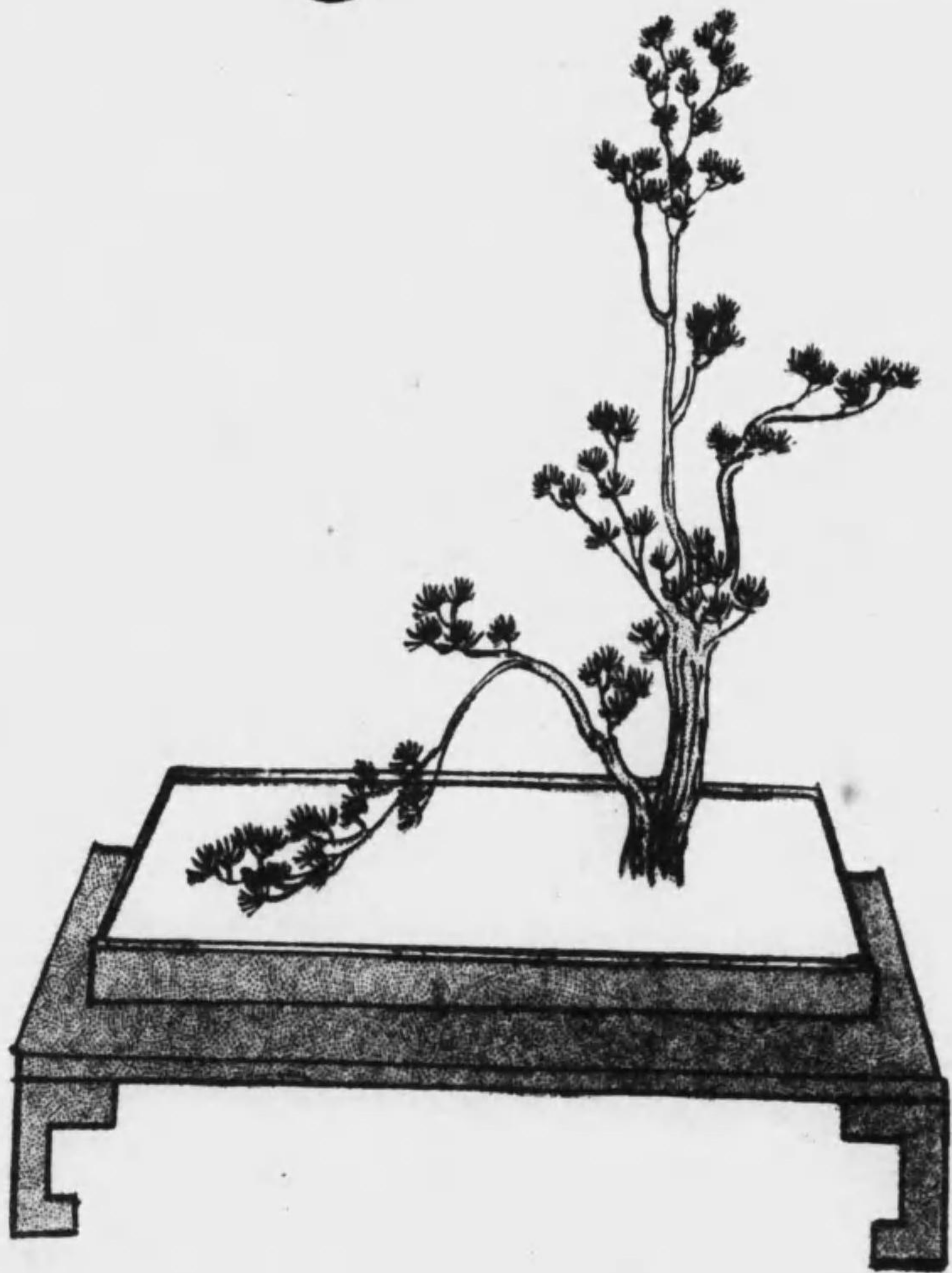




(二元式)



(投入式)

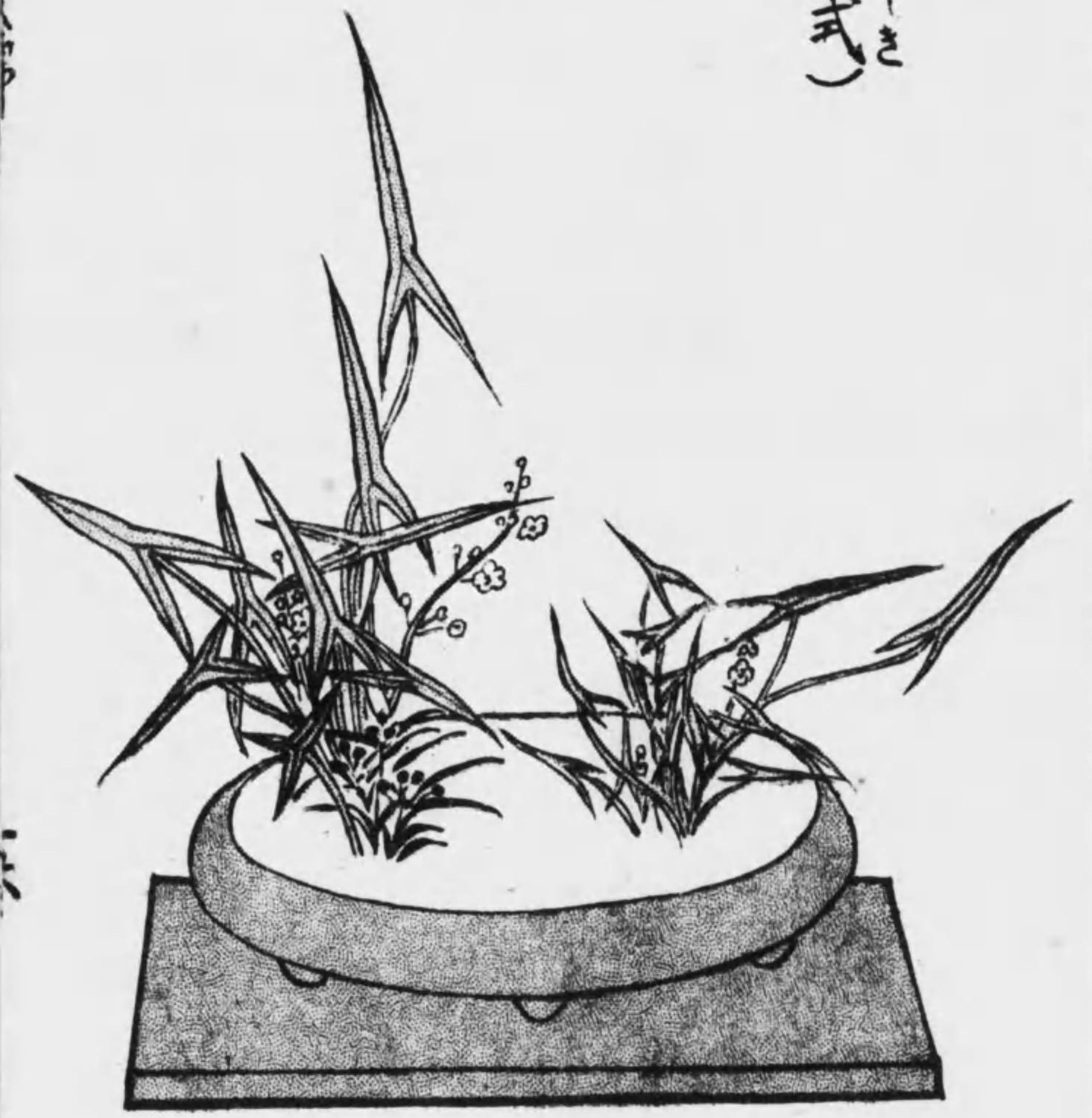




(文人式)

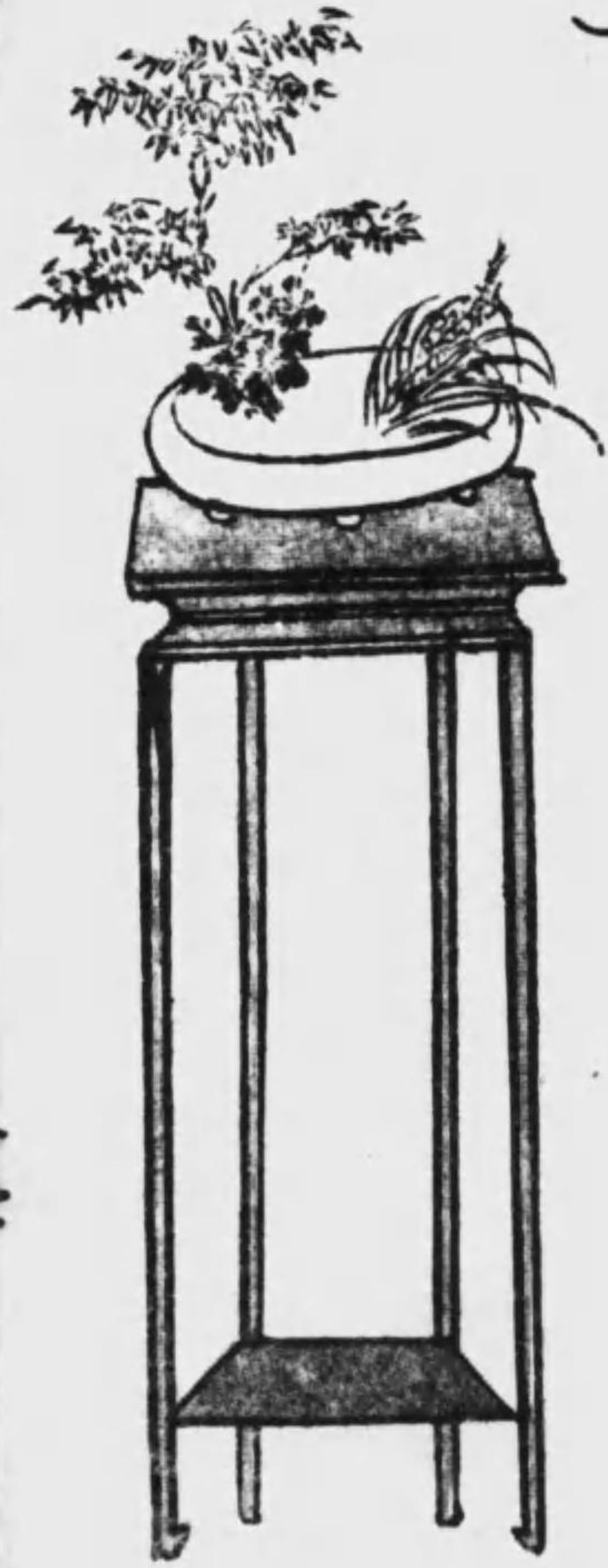


(聯立式)





(聯立式)



(一元式)



(聯立式)

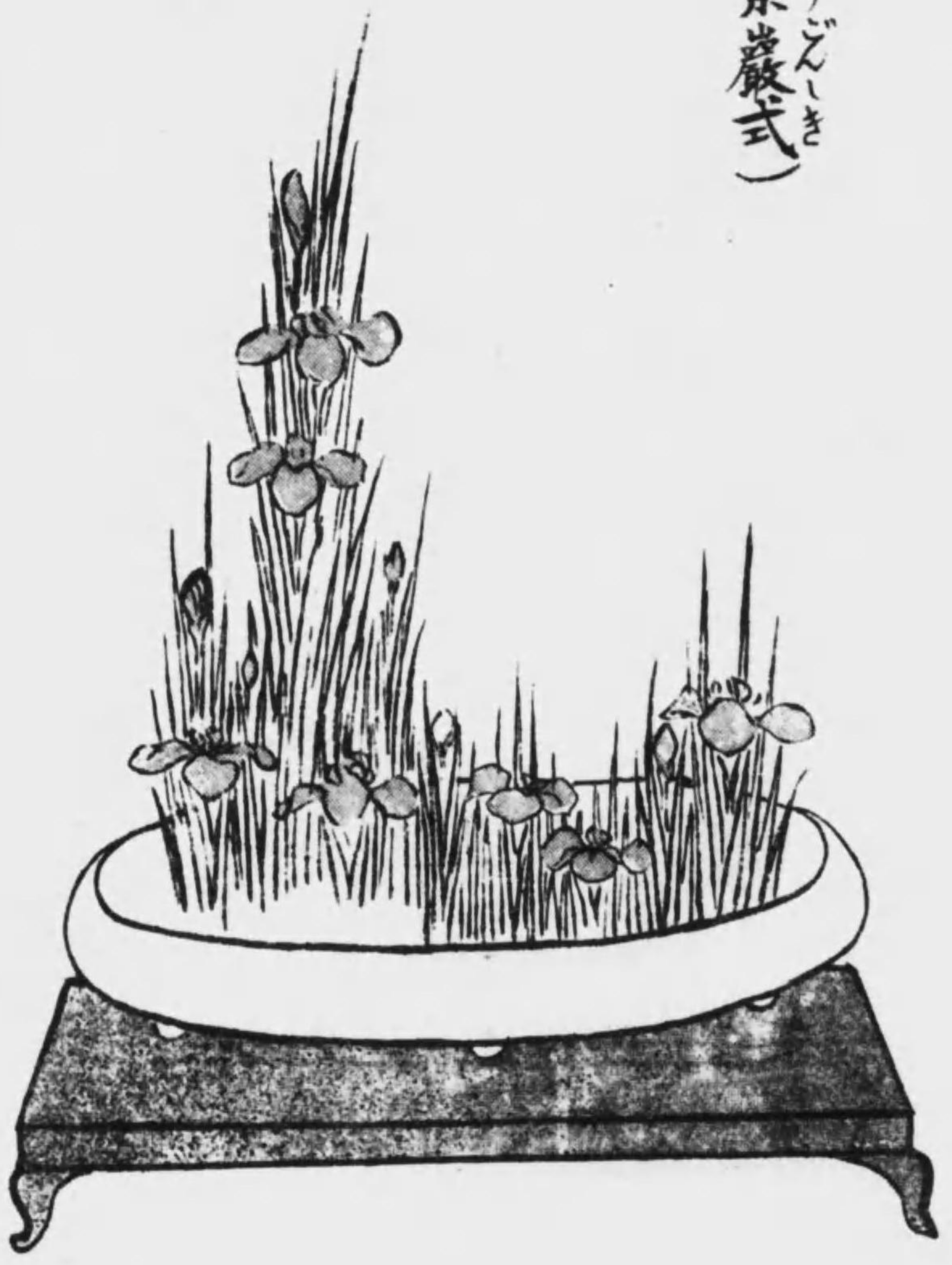




(聯立式)



すうじんしき  
(崇巖式)



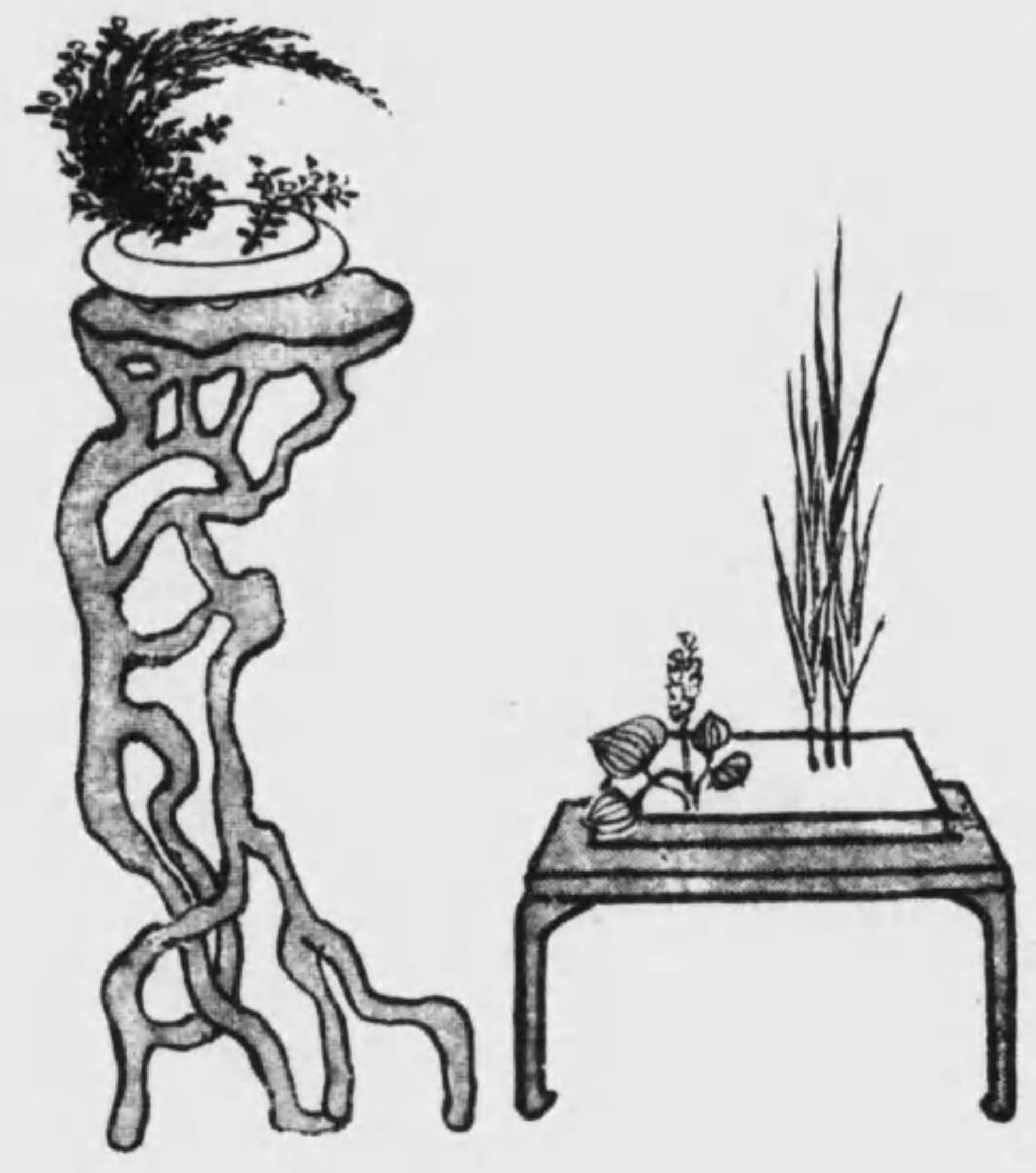


(聯立式)



(投入式)

横体  
(文人式)



千種大

千種大



(聯立式)

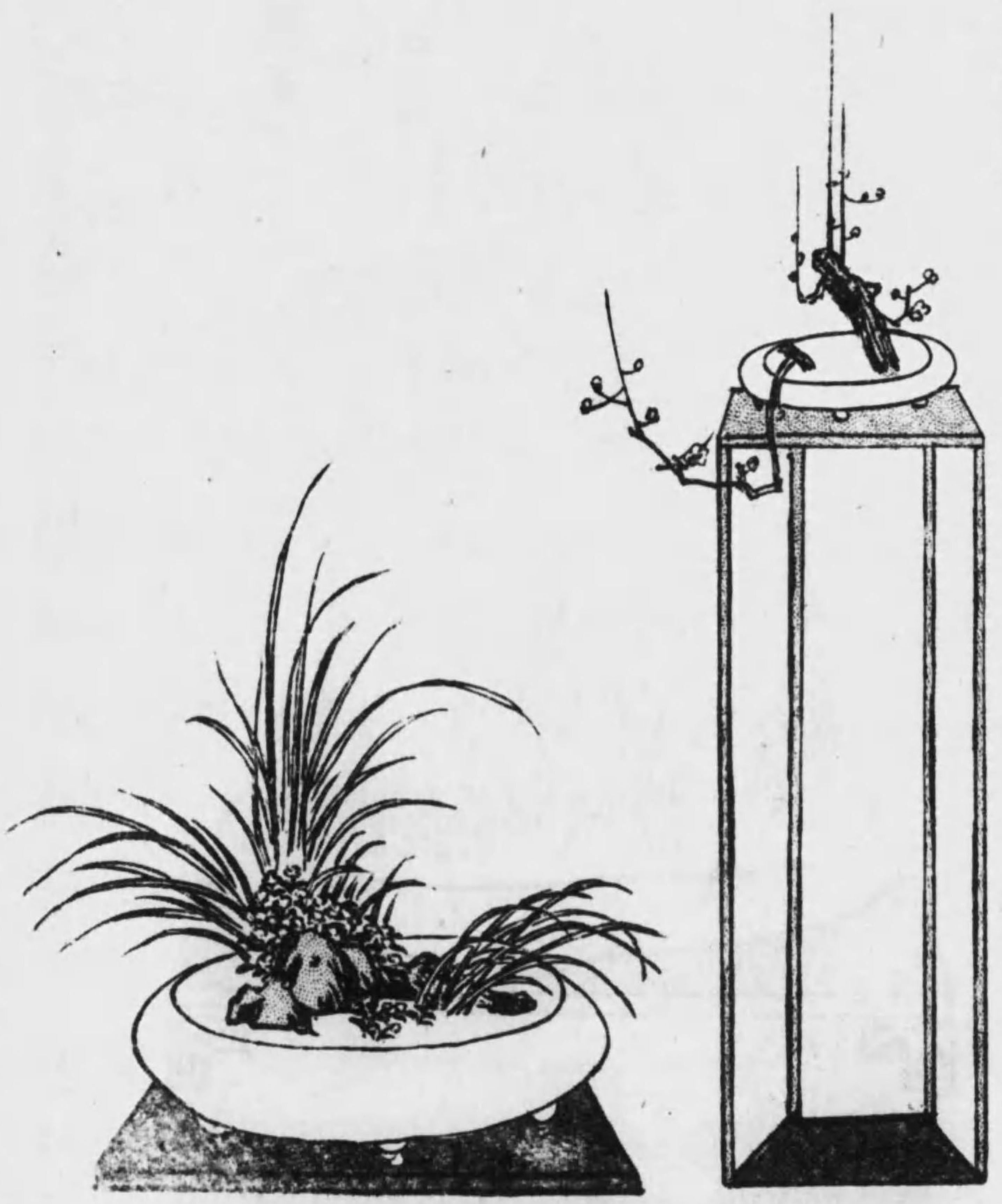
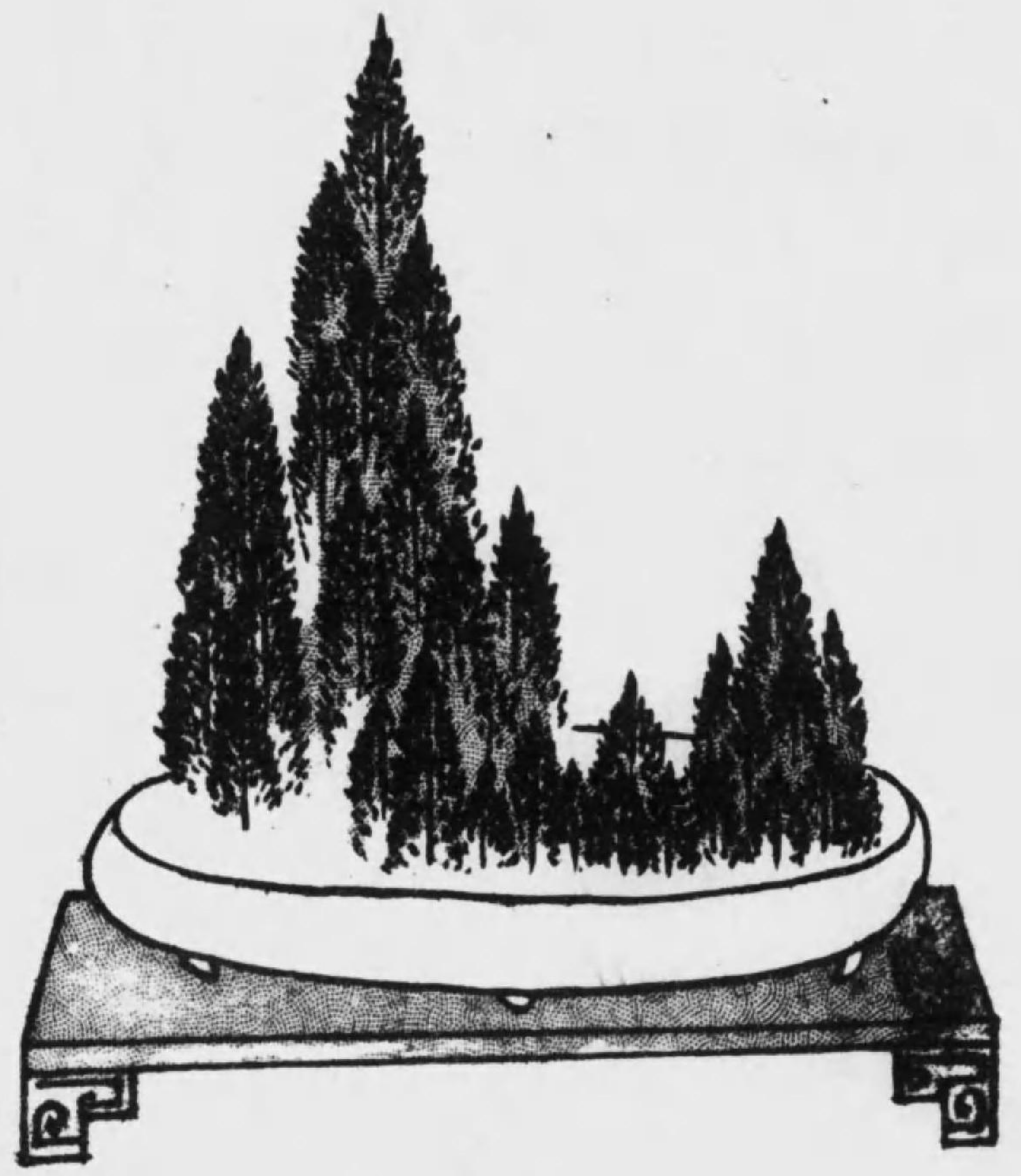


(一元式)





(崇巖式)





(聯立式)



(聯立式)



(全體文人式)





(聯立式)



(投入式)

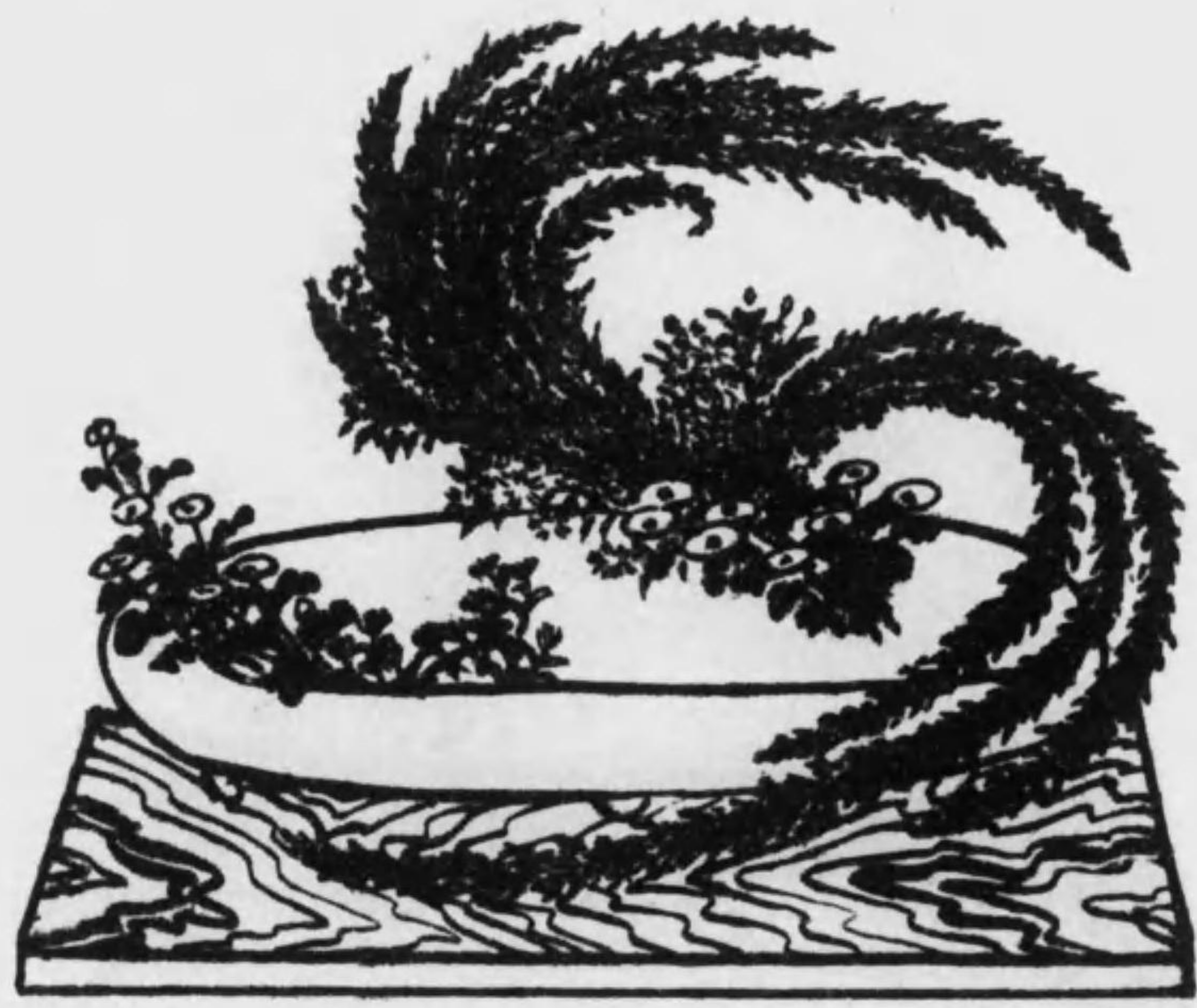


(聯立式)

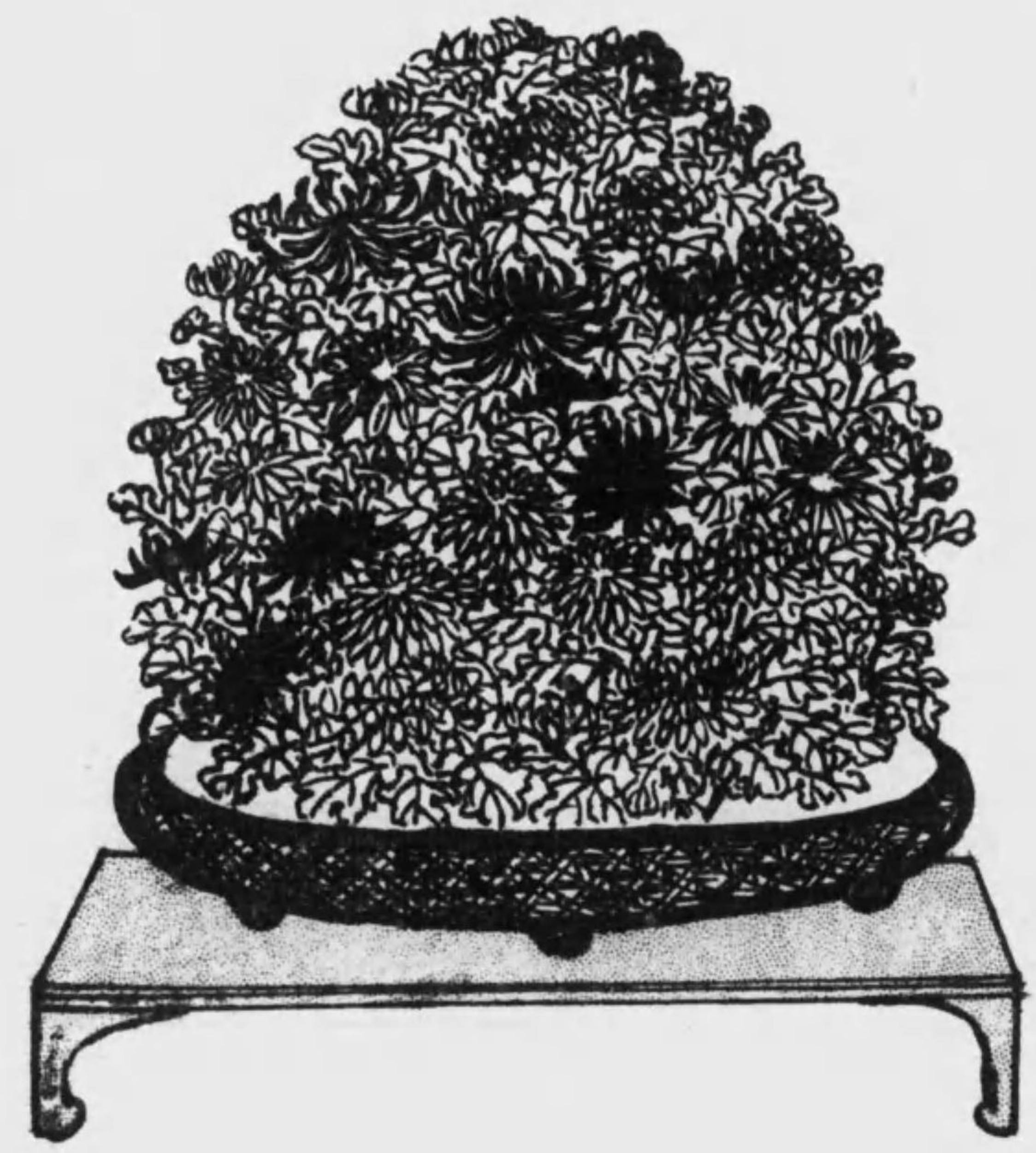




(横体)  
(聯立式)



(集卷式)





(斜体聯式)



(集參式)





(二元式)

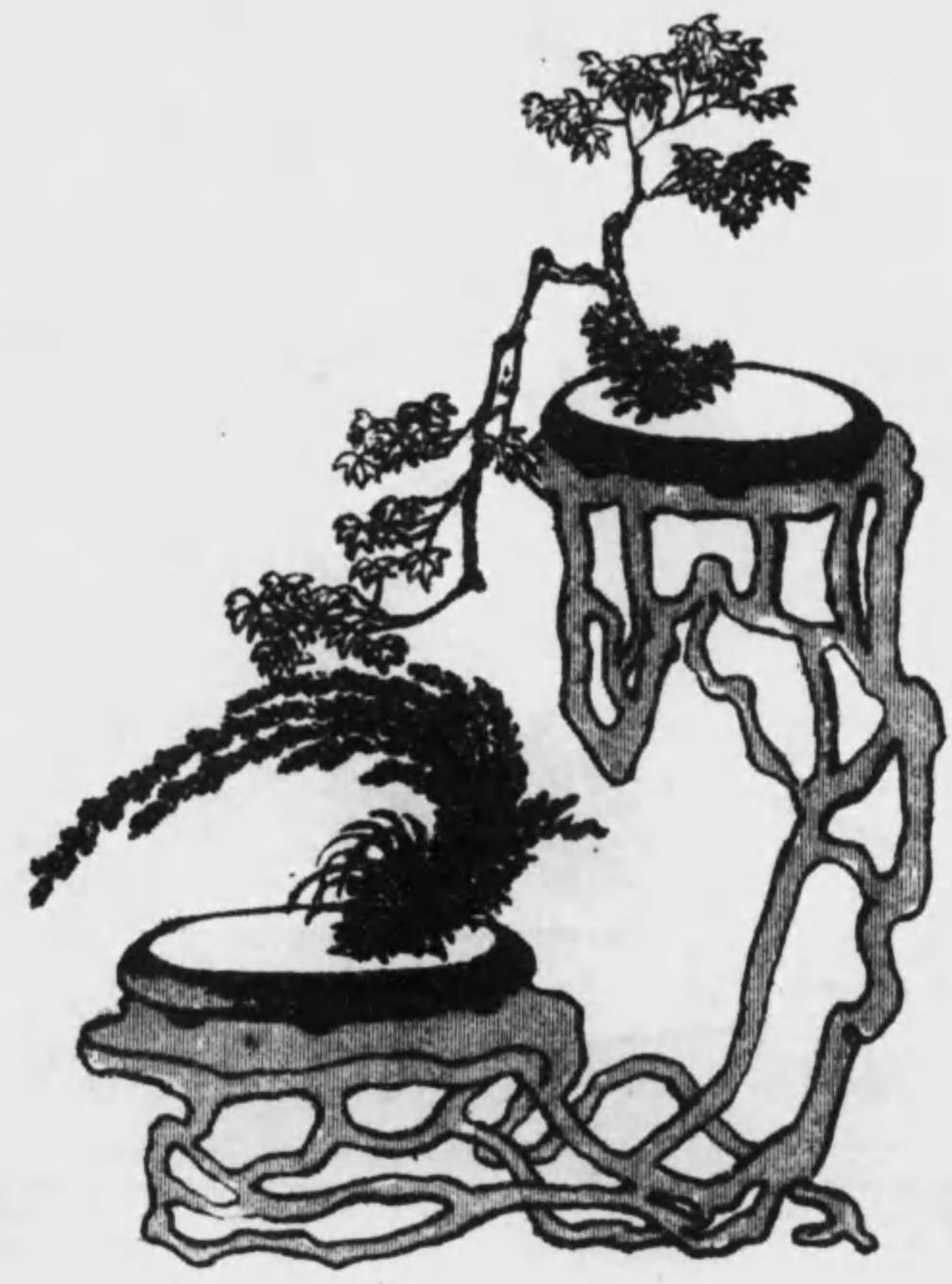


(投入式)





(投入式)



(文人式)





端午の盛花(高山真草菖蒲)  
(二元式)



(二元式)





斜倣文人式

直倣文人式



一元式



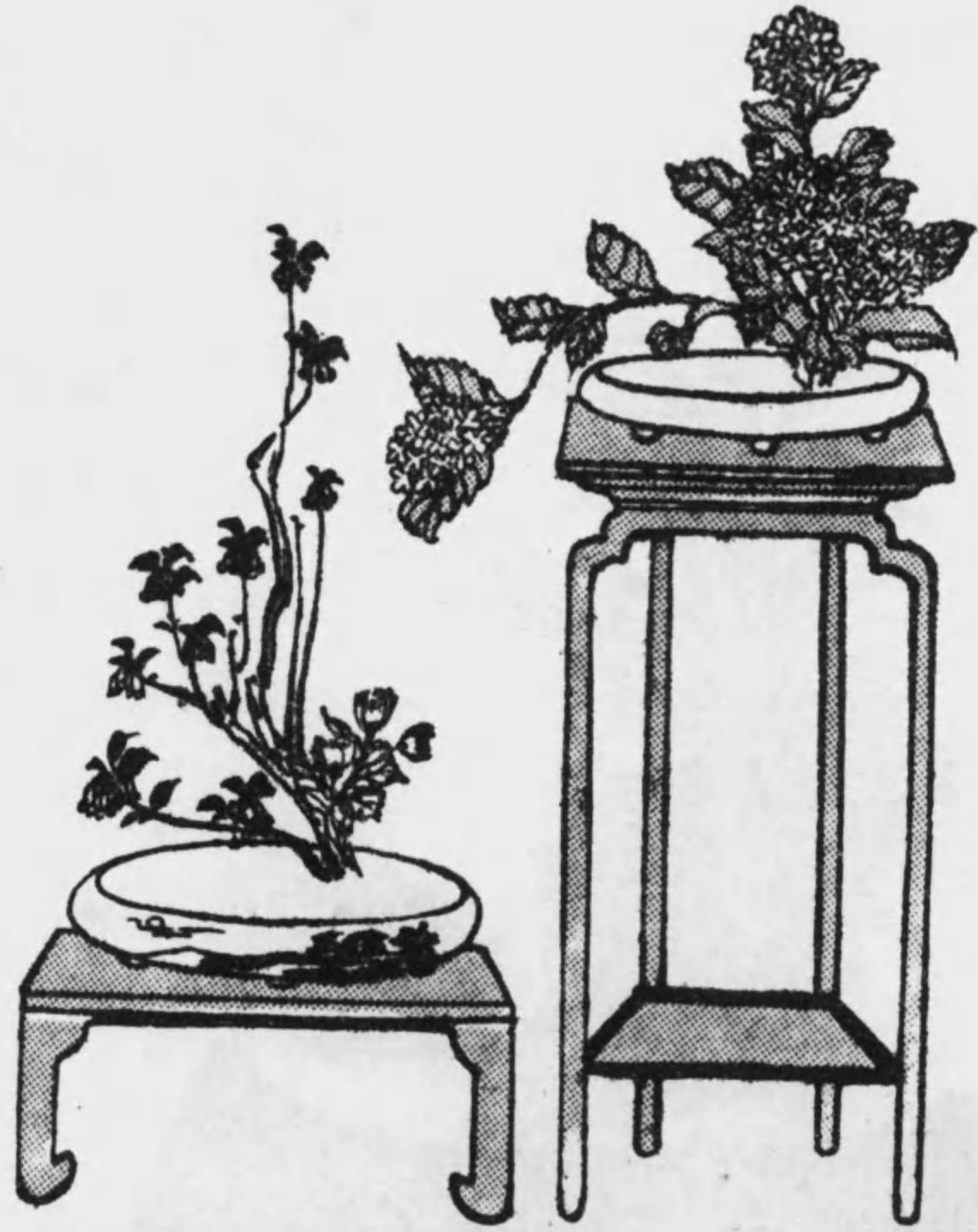


(聯立式)



(投入式)

(支人式)





322

16



安食金一四八拾六

(投入式)

(懸架式)  
一元式



三〇



終

